

日本国際理解教育学会会報

JAPAN ASSOCIATION FOR INTERNATIONAL EDUCATION NEWSLETTER

Vol.18 平成12年度 No.2 平成13年 2月 23日 編集発行：日本国際理解教育学会事務局
〒161-8539 東京都新宿区中落合4-31-1 目白大学内 TEL & FAX：03-5983-8132

目次

国際理解教育学会第11回大会のお知らせ
理事選挙結果
平成12年度スタディツアー報告
実践研究会報告
お知らせ
寄贈文献・図書
理事会・常任理事会報告
新入会員及び会員異動
事務局からのお知らせ

国際理解教育学会第11回大会のお知らせ

第11大会準備委員長：嶺井 明子

今年度の国際理解教育学会の研究大会は、6月9日(土)、10日(日)、筑波大学を会場として開催いたします。日程は例年通りで計画しております。

公開シンポジウムは、「国際理解教育におけるメディア・リテラシー」というテーマを設定しました。I. T. 革命という言葉が飛び交い、学校へのコンピュータの設置が進む中で、メディア利用の有効性と限界、光と陰、といった問題を国際理解教育の実践や教材開発などとの関連で考えていきたいと思っております。

特定課題研究は、「地球時代における『国』と人々——授業づくりの課題——」という主題で討論を深める予定です。準備委員会としましてはよい環境で大会が開催できますよう準備を進めております。多数の方々のご参加をお待ちしています。

1. 期日：2001年6月9日(土)・10日(日)

2. 場所：筑波大学

連絡先：〒305-8572 つくば市天王台1-1-1 筑波大学教育学系

日本国際理解教育学会第11回大会準備委員会

TEL/FAX：0298-53-4590(嶺井研究室)

TEL/FAX：0298-53-6731(井田研究室)

3. 内容：

6月9日(土)	午前 自由研究発表
	午後 総会 公開シンポジウム 懇親会
6月10日(日)	午前 自由研究発表
	午後 特定課題研究

4. 公開シンポジウム

提案者	吉田 浩(つくば市立竹園東小学校)
	滝 多賀雄(川崎市立長沢小学校)
	市川 克美(NHK名古屋放送局)
	小笠原 喜康(日本大学)
司会者	佐藤 郡衛(東京学芸大学海外子女教育センター)
	嶺井 明子(筑波大学)

理事選挙結果

日本国際理解教育学会選挙管理委員会委員長：森茂 岳雄

新年度の理事選挙の開票作業が、1月19日目白大学の学会事務局で、日本国際理解教育学会規約に則り、厳正に行われました。開票には、事務局から中西晃理事の立ち会いのもと、選挙管理委員の一柳武、岡田真樹子、森茂岳雄の三人が当たりました。

今回の選挙は昨年の規約の改正及び理事会の決定に伴い、被選挙人の年齢資格が70才以下（第7条）に、また理事の定員が15名に削減されました（理事会決定）。

開票結果及び当選者の氏名は、以下の通りです。

本結果は、ただちに会長、副会長に報告され、当選された理事には文書にて通知し、承諾の意思の確認を行いました。

なお、投票総数は127票で、そのうち有効投票数は124票でした。

当選者（50音順、敬称略）

天野 正治、新井 郁男、安藤 益代、宇土 寛泰、大津 和子、佐藤 郡衛、島 久代、多田 孝志、田淵 五十生、千葉 杲弘、中島 章夫、二谷 貞夫、嶺井 明子、米田 伸次、渡部 淳

平成11年度スタディツアー報告

国際委員会委員長：千葉 杲弘（国際基督教大学）

日本国際理解教育学会国際委員会は、2000年8月20日から29日まで中国のスタディツアーを実施しました。今回のスタディツアーは、これまでとは異なり参加者が全員大学関係者でした。本来なら、中国ではもっと小学校や中学校の現状を知りたかったわけですが、中国ユネスコ国内委員会は、当スタディツアー参加者のプロフィールを見て、見学先を高等教育機関に変えてしまいました。しかし、東邦大学城のように、日本では想像も出来ないような進展を見ることができ、多くの成果をあげることが出来ました。特に河北大学の日本研究所のスタッフの方々とは日本語で忌憚のない討議を行なうことができ、研究者としてお互いの理解を促進することが出来ました。ユネスコ国内委員会の杜越部長が、中国側の準備を指揮されました。杜越部長も彼の上司である国内委員会事務総長の張学忠氏も筆者のユネスコ時代からの友人で、彼らの変わらぬ友情と信頼に感銘を受けました。いろいろ多忙な公務のなか、いつも笑顔を絶やすことなく、我々に接して下さいました。また、北京教育学院の劉宝霞さんは全行程を共にして、通訳兼母親役として本当に親身に面倒を見て下さいました。

おかげで全参加者が病気になることもなく、元気に全行程を終えることができました。今回の中国のスタディツアーを通して初めて分かったことですが、当学会が開催した国際会議に現職教員研修を中心とした北京教育学院の院長さんと研究所長さんが参加したことでした。彼らは、国際会議の討論に非常に刺激され、それまで中国では国際理解教育は十分に発達していなかったため、その必要性を痛感し、帰国後早速、中国ではじめて国際理解教育の検討委員会を学内に設けて、研究を始めました。当学会が中国教育界に与えた影響ははかり知れないものがあります。今後とも、この新しく芽生えた中国の国際理解教育の芽を大切に育ててあげなければならないと思います。

中国の学校は日本の中学校校との交流を熱望しています。今回もバオディン市(法定市)の高校が日本の高校との交流を要請しました。中国の高校は競争が激しく、訪問した高校は本当のエリート校でした。日本の高校は太刀打ちできないほど施設も完備しており、このような学校が中国の各都市に存在しており、大躍進の原動力となる世代の層の厚さを感じました。

参加者は夫々いろいろな思い出を胸に帰路につきました。一番強烈な印象は、将来に向かって躍進しようというエネルギーの力強さと急速な変化でした。中国は世界の一大勢力として国際政治をリードする国であり、日本にとっては永劫に隣人として親しく付き合うべき国です。今回は北京周辺しか訪れることができませんでしたが、広大な中国をもっと時間をかけて学ぶ必要があります。今回のスタディツアーはその第一歩とも言えます。この学会が多少でも現在の中国理解に貢献できたことを誇りに思います。

◇平成12年度スタディツアーに参加して：星村平和（帝京大学）

（9月の常任理事会に提出されたものを転載します。）

まずもって、企画から運営、現地での対応まで、献身的なお世話を頂いた千葉先生に感謝申し上げたい。また、千葉先生のご指導によって、ICUの院生が作成してくださった分厚い資料は、事前の研究だけでなく、ツアー中も大変有効に活用できた。この点についてもお礼申し上げたい。

訪問先は、さすが千葉先生の人脈と学会ならではのものです。一般の旅行とは数段違つかたちで、中国教育の現状と国家的課題に直接触れることができた。

参加者中の大学人の殆どは、異文化コミュニケーションや留学生担当の方々であり、それぞれの大学で真剣に取り組んでいる様子を直接窺い知ることができ、勉強になった。

また、若い院生や学部生が、体当たりで異文化体験をしたり、積極的かつ物怖じせずに、訪問先の方々に質問したり、ディスカッションに参加したりするパワーあふれる姿に、新しい若者を見た思いがした。

スケジュールは過密かつハードな面もあったが、参加者一同、学級の姿勢をくずさず、意欲的に日程をこなすことができ、何よりであった。

「スタディツアー」は、文献やその他の情報を通しての表層的な異文化理解と違い、深層に触れる得がたい機会だけに、学会として引き続き実施して欲しいものである。その意味でも、毎回のすばらしい「報告書」は、学会の貴重な財産といえよう。

実践研究会報告

◆1. 目白園大会報告

目白大会実践研究委員会委員長：多田孝志

2000年度の実践研究会目白学園大会は、11月15日(水)東京都新宿区の目白学園中学校・高等学校において開催されました。

今回の大会は、「教材開発から授業実践まで」をテーマに中学校・高等学校の各教科の特性を生かした授業をさまざまな立場の方々が参観し、論議を深め、国際理解教育の実践の方向を明かにすることを意図して開催されました。また多文化共生時代の重要な課題である他国・他民族理解の方法や内容について多様な視点から深めることも大きな目的としました。

当日は全国各地から、現場教師、研究者、帰国子女関連団体関係者、大学院生、報道関係者、海外旅行関係者など158名の参加者を得ることができました。

実践研究会では、午前中に各教室や体育館を会場にした公開授業、午後からは、公開された授業を検討する実践検討会、全体会および実践討論会がもたれました。その概要を記します。

◎公開授業

各授業では、教科の特色を生かした国際理解教育の実践が公開されました。紙幅に限りがあり詳細には記せませんが、目白学園中学・高校の各教科の先生方が協力し、討議を繰り返す、内容を深めた授業には、さまざまな工夫がみられ、今後の国際理解教育の実践の参考になるものでした。

公開授業一覧表

学年	教科	担当者	単元名
高校2年	保健体育	体育科全員	ソフトバレーボールによる国際交流
高校2年	国語	大木 玲子	漱石の見た二十世紀初頭のイギリス、そして今―
中学3年	国語	箱崎 禮子	創作俳句 国際性の素地としての感性・感覚
中学1年	社会	高橋 洋明 他	地域素材を生かした授業―新宿区内の異文化さがし―
中学1年	理科	五ノ井 智子 他	音の世界 科学的見方・考え方を育む
高校1年	音楽	吉田 愛理 正木 三雅	「Caro mio ben」歌詞唱
高校2年	数学	森本 俊彦	コンピュータとインターネット活用の試み
高校1年	家庭	家庭科全員	日本の伝統文化を学ぶ、ひな祭り
中学2年	英語	マリア・ジョーンズ	宇宙の一部としての地球
高校1年	英語	ケネス・クラウン	日本人学習者が外国人へ尋ねる質問の「適切性」に関する自覚を高める
高校1年	書道	田口 繁	「行書体」
高校1年	美術	花里 裕子	「日本の美しさ」を紹介するイラストレーション制作
高校1年	工芸	渡 正士	コラージュによる私のマークデザイン制作

◎実践検討会

実践検討会は、各教科毎に分かれて開かれました。公開された授業を手がかりに、学習教材の開発、学習プロセスのデザイン、教師の役割など日常の実践活動にかかわる多くの問題・疑問について熱心な討議が続けられました。座長に各分野のすぐれた研究・実践者を招聘できたことも、論議の質を高めました。

高校国語	座長	安藤 益代	日本国際交流振興会
高校国語	座長・司会	浅田 孝紀	筑波大学附属坂戸高等学校
中学国語	座長	原 國人	中京大学
中学国語	司会	斎藤 直子	杉並区立中瀬中学校
社会	座長	星村 平和	帝京大学
社会	司会	伊藤 實	葛飾区立亀青小学校
数学	座長	清水 静海	筑波大学
数学	司会	佐藤 公康	船橋市立葛飾中学校
理科	座長	畑中 忠雄	都留文科大学
理科	司会	安藤 和正	目白学園中学校・高等学校
家庭	座長	村越 晃	目白大学
家庭	司会	大谷 浩一	足立区立千寿第八小学校
保健体育	座長	山本 礼二	戸田市喜沢中学校
保健体育	司会	小山 武男	目白学園中学校・高等学校
英語	座長	服部 孝彦	大妻女子大学
英語	司会	久保田 一志	足利南高等学校

◎アトラクション

2000年度全国高等学校選手権の3部門すべて、完全優勝したチアリーダーディング部の華麗な演技、都大会で上位入賞が常連のプラスバンド部の見事な演奏が行われ、参加者から盛大な拍手が送られました。

◎全体会

1. 開会挨拶

中西晃本学会副会長が、学会を代表して挨拶されました。中西副会長は、この学会は1992年に創立された国際理解教育の実践・研究を志す団体であり、学会員が500名いること、学会の特色として、実践研究会があり毎年全国各地で研究大会を開き、授業の公開をもとにしての論議や、現場で実践する先生の実践発表を行ってきたこと、学会や実践研究会の概要や経緯を述べました。また中学校・高等学校の公開授業は初めてのことであり、実践研究の広まりが期待されると述べられました。最後に開催にあたり、協力をしてくださった、目白学園への謝意を述べて挨拶を締めくくられました。

次いで目白学園を代表し佐藤弘毅理事長が挨拶された。佐藤理事長は歓迎の言葉を述べられた後、ユネスコ憲章を引用されつつ国際理解教育の重要性を語り、また目白学園の教育の大きな支柱は国際理解の教育であるとも述べられました。

◎実践討論会

実践討論会の詳細については、学会誌に掲載いたします。ここでは概要のみ記します。

報 告 者	岩崎 いくみ (国際基督教大学大学院生)
	小島 亜希子 (国際基督教大学大学院生)
	石井 博子 (国際基督教大学大学院生)
コーディネーター	星村 平和 (帝京大学)
	米田 伸次 (帝塚山学院大学国際理解研究所)
指 定 討 論 者	小関 一也 (早稲田大学)
	野中 英雄 (目白学園中学校・高等学校)
	川口 修 (東京都江東区立第四大島小学校)
大学院生指導	千葉 果弘 (国際基督教大学)

はじめに、米田先生が、実践討論会のねらいとして、本日のテーマはインド理解だが、あくまで国際理解教育のモデルであること、この討議を通じて国際理解教育の実践の方向性まで話し合いたいと趣旨が述べられました。

次いで、国際基督教大学大学院生によるインド調査および教材開発の報告がされました。報告の前に院生を指導された千葉先生から、インド調査の概要と目的が説明されました。

始めに登壇した岩崎いくみさんは「人口」、2番目の小島亜希子さんは「教育」、最後の石井博子さんは「文化」を視点として、詳細なレポートをもとにした報告がなされました。院生3名の報告を受けて、3名の指定討論者からのコメ

ントが出されました。川口修先生は、教材開発の3視点として、1.子どもの実態にあったもの。2.ねらいにあったものであるかどうか。3.子どもが身近に捉えられる、を提言されました。野中英雄先生は数学的思考力を高め、国際性の素地を形成するのに人口問題は有用な素材である。また、最近の数学は生活周辺の問題を取り入れる方向にあるがそれはよいとの意見を出し、小関一也先生は、文化の問題を学習に取り入れる視点として、1.ネガティブな見方の払拭、2.多様性、3.歴史認識、4.地球市民育成の4つを指摘されました。

その後会場から多様な質問・意見が出され、論議が深まりました。それらは概ね次に集約されました。○グローバルな視点からの教材開発は、どのような留意事項や問題点があるか。○人口の爆発的増加と核開発といった世界の厳しい現実を学習の問題につなげるにはどうしたらよいか、等々でした。

実践討論会の最後にコーディネーターの星村先生が、多様性と統一性、環境・核開発、IT革命などインドは教材開発の宝庫であるとし、6つの視点から、インド研究の意義と、今後の国際理解教育の方向性について示唆に富んだ見解を述べられ、実り多かつた討論会を閉会しました。

◎全体総括

大会の最後に川端末人副会長より、全体の総括がされました。川端副会長は、

今後の教育において、グローバルな視点をもつことの重要性を指摘され、また、大学で国際関係論や世界の歴史をきちんと学ぶことが必要と述べられました。

学校現場の先生方は、どういふものを国際理解教育というのか、悩んでいる。これを明かにして行くことが学会にとって重要であるとも語られました。

さらにインド理解については、なぜインドなのかを明確にすることの必要や、新しい試みであるスタディツアーによる調査の留意点についても言及されました。さらに、国・民族を理解していくことは、たとえば、人間の価値を求める生き方を直視した、また世界の厳しい現実を見据えたリアルな研究をしなければならないと、今後の研究の方向を示唆されました。

大会終了後、懇親会が開かれ、参加者が和やかに歓談しつつ、親交を深める姿が会場の各所でみられました。

実践研究会の開催にあたり、会場の設営、公開授業、参加者への案内は、目白学園の教職員の方々が行ってくださいました。掲示物、茶菓の用意、暖房等に、参加者を温かく迎えてくださるこまやかな配慮が感じ取れました。こうしたご支援なくして今回の研究会は開催できませんでした。参加者一同、深く感謝した次第です。

本報告の作成にあたり、善財利治会員、目白学園 鳥越順子、小長井香苗両先生の多大の協力を得ました。

◇実践研究会に参加して：亀青小学校校長 伊藤 実

環境のよい目白学園中学・高校での実践研究会は予想以上にすばらしいものでした。

何よりも、この研究会の運営の円滑さが印象に残りました。職員の方々が実に気持ち良く対応してくださいました。案内の掲示、控え室での対応に、陰でしっかり支えてくださる人々の存在が推察できました。

公開された各教科の授業には驚かされました。教科の先生方が一体となり、新しい分野に取り組む熱気が伝わってきました。国語では、漱石の作品と国際性の結びつき、また俳句作成による感性を磨き、表現することを基礎においた実践がありました。数学ではインターネットの活用、理科では音の伝わり方を通しての科学的思考力の育成が試みられていました。若い先生を授業者にし、多くの先生方をそれをもりたてている様子が分かりました。体育では体育科の先生方全員が生徒にまじって活動していました。家庭科では、実物資料等も活用し、生徒が発表する授業展開でした。授業の流れの中にさまざまな工夫が感じられました。外国語では外国人の先生方の斬新な進行、ユーモアを交えた語りや啓発されました。美術・音楽・書道の授業は、教科の特性と国際理解を結びつける工夫にあふれていました。教科の専門家が国際理解に真剣に取り組むことにより、国際理解教育の広がりがあることが示された思いがしました。

授業後の実践検討会、私は社会科に参加しました。こどもたちが新宿区内でさまざまな異文化と出会い、発見したことを発表する姿に日頃の指導を感じました。今回の経験が生徒の視野を広げ、心を開かせる契機になったことは間違いないと思います。検討会で話し合われたように、あとはこの経験をどう発展させるかが課題と思いました。

チャリーディングや吹奏楽のすばらしい演技や演奏を鑑賞後、午後からは実践討論会に参加しました。インドをテーマにということで、かつてニューデリー日本人学校に勤務した経験から興味をもっていました。三年間の滞在の中で、インドの多様性、雄大さ、底知れない魅力を感じていました。若い人々が、巨大なインドの社会に飛び込んでつかんだ教材、それを生かした教材開発、それらは実践者としての熱い学習への思いを喚起するものでした。この実践討論会では、千葉、米田、星村の諸先生が見事に話題を提示し、広げ、深め、指定討論者の方々が鋭い指摘や提案をすることにより、高いレベルの論議がされたように思いました。

1日を終えて、充実感がいっぱいでした。これこそが今後の研究の方向だという思いがしました。ぜひ継続してほしいと願います。

◇国際理解教育の教材を作成して：国際基督教大学大学院 石井 博子

2000年3月、私達はインドヘスタディーツアーに出かけ、帰国後、各人がインドにおける主要なテーマについて資料と教材を作成した。そして今回幸いにも本学会の実践研究会で発表をさせて頂ける機会に恵まれ、大学院生3人が発表をさせて頂いた。

今回教材を作成するにあたって私達が共通に抱いていた問題が二つあった。一つ目は、参加者全員が教職の経験が無かったため、いかに生徒が興味を示す教材にするか、と言う事、そして二つ目は、私達の目を通して見てきたインドをいかに主観的に偏らずに客観的に教材として生徒に伝えられるか、と言う事だった。

一つ目の打開策として、私達はコンピューターを使用して視聴覚にうったえる教材を考えた。実際にスタディーツアーで写した写真や私達が会って話してきた人たちを登場させる事で、なるべく「生」の「動いている」インドを生徒達に紹介し、そして興味を惹きつけるよう努力した。

二つ目の打開策として、私達がインドと接する時に、前もって視点を狭めるのではなく、スタディーツアーの体験からいろいろな視点の可能性を検討することにした。

実はこの問題は私にとって大変難しい課題であった。私は両親の仕事の関係で小さいころからインドに住んでいる。インドに長く住んでいるからインドを一番よく知っているだろう、と思われがちだが、長く住んでいるからこそ分らない事だらけで、そして客観的にインドを見ることができなくなっているのだ。スタディーツアーで、普段訪れることのない学校や、政府機関、そしてスラムを自分の体で感じたことで、新しいインドの側面を知ると同時に、教材化の過程で多くの書物を読んだことが、私にとってはインドを知る手がかりの一つとなった。

教材はまだ作成段階で、3月には再びインドへ赴き、今回作成した教材を英訳したものをインドの人達に見て頂き、そして内容を確認してもらう。今回学会で発表した後、多くの先生方から貴重な御意見を賜ることができた。先にも述べたが、私達は教職の現場を経験していないため、現場からの御意見は今後の教材作成に大変参考になる。今回学会で頂いた御意見を無駄にすることなく、今後も教材作成に励んでいきたいと思う。

最後に、私達をお世話して下さい、目白学園の先生方、コメンテーターの先生方、そして事務の方々には深く感謝の念を表したい。

◆2. 熊本大会報告

実践研究委員会委員：米田 伸次

実践研究委員会主催の2000年度第2回「実践研究会」が、2月4日、熊本市国際交流会館で、約200名の参加を得て開かれ、好評のうちに終了した。今までは、年1回実施されていた研究会が、年2回実施されたのは今年が初めてであり、関東圏、関西圏以外で実施されたのは、98年度の島根研究会について2回目である。

今回の熊本研究会は、共催に九州地区高等学校国際教育研究協議会、熊本県高等学校国際教育研究会ならびに熊本国際理解教育を進める会が中心となって、共催6団体、後援4団体という地元の広汎な協力を得て行われたこと、とりわけ、全国高等学校国際教育協議会・九州地区事務局長の榎 定信熊本工業高校教諭を中心とした地元の教員や NGO、YMCAなど多くのボランティアの協力を得て実施されたところに大きな特色があった。

現在、学会の会員分布は、関東圏と関西圏に片寄りが見られる。学会が今日の日本の国際理解教育のかかえている課題に応え、理論と実践を結合させ、学会の会員を全国的に拡大させ、日本の国際理解教育を一層進展させていくための一つのアプローチがこの実践研究会であるが、今回の研究会もこうした目的を担って実施されたものであることは言うまでもない。今回の熊本研究会の成功は、今後学会の拡大発展のためには、全国各地の国際理解教育に関連するさまざまな研究会や団体、組織とも、日常から豊かにネットワークしておくこと、そうした各地との緊密な連携のもとに進めていくことが、単に会員拡大の発展だけでなく、日本の国際理解教育をより豊かにしていく上で、いかに大切であるかを改めて痛感させてくれたように思う。

ところで、今回の研究の総合テーマは「グローバル社会に生きる人間形成としての国際理解教育」。こうした国際理解教育をすすめていくキーワードとして、「学校と地域をつなぐ」「総合学習」を設定し、午前中の小・中・高校の3分科会は、具体的な「学校と地域をつなぐ」さまざまな実践報告を中心に進められ、実践からの学びと課題を共有し合った。午後は、もう一つのキーワード「総合学習」について星村平和学会常任理事（帝京大学教授）より、「総合学習における国際理解教育の展開」と題して基調講演をいただいた。さらに、つづくパネルディスカッションでは、「総合学習をリードする国際理解教育とは」と題して、分科会と基調講演での学びを踏まえて、研究会の二つのキーワード「学校と地域をつなぐ」「総合学習」をどうつないでいくのか、さらに、それを「グローバル社会に生きる人間形成としての国際理解教育」へどう発展させていくのかについて、共に考え、語り合った。

まず、分科会においては、小学校分科会では三つの報告（岩本貞子・阿蘇郡白水村立中松小学校教諭の「地域との交

流を通してたくましく生き抜く児童の育成)、山下亜樹・JICA 国際協力推進員の「教室から世界が見える」、伊志嶺朝紀・コミネット協会の「アジアの田舎に学ぶこれからの日本」、中学校分科会では三つの報告(音光寺以章・菊地郡七城中学校教諭の「韓国との交流 10 周年を向かえて」、水田智英・天草郡苓北町立都呂々中学校教頭、岩本智浩・都呂々中学校教諭の「生涯学習の視点に立ち、国際社会で主体的に生きる生徒の育成一町・地域との連携を通して」)、熊本 YMCA・ICR 統括の「ワークキャンプから見た国際理解教育の可能性について—熊本 YMCA ワークキャンプの活動事例から—」、高等学校分科会では三つの報告(馬場純二・熊本県菊地農業高校教諭の「韓国との交流」、原嶋 茂・CIC カナダ国際大学事務局長の「生涯学習・カナダで学ぶとは」、中野佳代子・国際文化フォーラムの「民間団体の学校教育への支援について」)が行われた。

こうした各分科会での報告は、いずれも分科会テーマにそくした、バラエティに富んだ密度の濃い内容の実践であった。小学校分科会の助言者の川端末人学会副会長は、「何より感銘させられたのは、参加の先生方の語る熊本の文化が、21 世紀を迎えるに当って国際理解教育の発展に大きくのしかかっている地域文化をめぐる問題を考えさせたことである。地域の文化は、人に誇りと自尊心を与え、自らのためになるか否かの選択を決める基盤であり、世界と人生に真の意義を与える。グローバル化のなか、そのようなルーツを考えることなくして、国際理解教育の躍進はないという、この教育の在り方を問い直す根本的視座に目覚めさせてくれたことである」というコメントを以って、分科会の報告とさせていただきます。

星村理事の基調講演は、30 分という短い時間であったが、「総合的学習」の意義と今後の課題について、的確に指摘、実に内容の濃いものであった。理事は、社会の変化に対応した「学校観」「学習観」の転換がいま求められており、「総合的学習」を新しい創造への「学び」と新しいカリキュラムの創造へ向けて一つの教育のチャンスとしてとらえる、前向きで積極的な姿勢こそが大切である。そのためには、教師の意識、資質が今まで以上に問われてくることについても強調された。

パネルディスカッションは、米田のコーディネーター・司会のもとに、4 人のパネリスト(岩崎裕保・今日と造形芸術大学助教授、榊 定信・熊本工業高等学校教諭、渡部 淳・学会常任理事・ICU 高校教諭、多田孝志・学会常任理事・目白学園中高校教諭)によって、それぞれにパネルディスカッションのテーマを踏まえ、さらに 3 つの小テーマ「学校と地域をつなぐということ」「つなぐことと生きる力を育むことのかかわり・効果的なつなぎ方とは」「つなぐことと総合的学習の関連」に分けて、それぞれにコメントをいただくというスタイルで展開された。学校と地域をつなぐということは、学びのネットワークを広げることであり、学校と地域がスクールコミュニティを形成していくなかで、新しい学びの場としての学校文化が期待される。子どもたちは、地域、郷土を知る、地域のさまざまな人たちや事象との豊かな学びの出会いを通して、自己を確立し、自信を深めていく。このことは国際理解教育の基本的な「営み」である。学校と地域の豊かなつながり、連携によって創造されていく総合的学習こそ、子どもたちにとって真の生きる力を育む場となっていくなど、研究会の総合テーマ「グローバル社会に生きる人間形成と国際理解教育」を考えるうえでの貴重なヒントが多数提言された。地元熊本からパネリストとして参加された榊教諭が、今回の研究会へ「風びと」としてやってこられた方々(講師)の情報やコメントを、「土びと」としてのわれわれが、この土壌の中でそれらを自分たちのものとしてどう育てていくかこそがこれからの大切な課題と発言されたのが印象的であった。

なお、今回の大会には地元熊本から熊本大学の宮本光雄教授、九州ルーテル学院大学の豊田憲一郎助教授も分科会助言者としてご協力いただいたが、熊本大学からは 100 名近い教育学部の学生も参加、共に一日、学びを分かち合った。宮本教授からは、学生たちの参加感想レポートが私の手元に多数寄せられているが、どのレポートを読んでも、今回の研究会が彼らにとっていかに新鮮で大きな学びの場であったかが率直に綴られている。

なお、今回の実践研究会には、中島章夫常任理事(国際教育馬場財団理事長)、樋口信也常任理事(帝京大学教授)も参加、分科会の助言者を務めていただいた。

お 知 ら せ

◆韓国スタディツアーへのお誘い(国際委員会:千葉 杲弘)

国際委員会は 2001 年度の活動として韓国へのスタディツアーを企画しております。韓国にはアジア太平洋地域の国際理解教育地域センターが設立され、今年度から活動を開始しました。このセンターと韓国ユネスコ国内委員会の協力のもとにスタディツアーを実施します。まだ詳しい内容については決っていませんが、これまでどおり 10~15 人のメンバーを募集します。時期は 8 月 20~25 日頃を予定しています。興味のある方は国際委員会の千葉まで御連絡下さい。またスタディツアーに対するご要望があれば早めにお知らせ下さい。韓国側に伝えてその可能性を打診します。

□申し込み先

千葉杲弘 国際キリスト教大学 181-8585 東京都三鷹市大沢 3-10-2
TEL: 0422-33-3143 FAX: 0422-34-6982
E-MAIL: chibaa@icu.ac.jp

◆第3回懇話会のお知らせ (渡部 淳：国際基督教大学高等学校)

発題者：千葉 泉弘 氏(国際基督教大学教授)

テーマ：「私の国際理解教育との出会い」

日時：4月14日(土) 3：00～5：00PM

場所：国際基督教大学(ICU)。教育研究棟。

— 部屋は、当日玄関に掲示します。

交通：中央線「武蔵境」駅南口より。小田急バスで「大学行」終点下車。(約11分)

国際理解教育の第一世代ともいえるべき研究者に、その歩みを語っていただくシリーズの第3弾。ユネスコで30年以上教育協力の仕事を体験された千葉氏に、国際機関での活動、大学での教育などについて自在に語っていただきます。

参加ご希望者の方は、4月11日(水)までに下記までにご連絡下さい。

TEL (0422-33-3419) またはFAX (0422-39-3417) にICU高校、渡部淳まで

◆会員の研究動向調査へのお願い (帝京大学：樋口信也)

紀要編集委員会では、2001年6月刊行予定の『国際理解教育』第7号誌上に会員の研究動向を掲載するため、昨年12月中旬に「研究動向調査票」を皆様のお手許に郵送しました。既に55名の会員の方々から回答をいただき、皆様のご協力に感謝申し上げます。

なお、一人でも多くの方々から研究動向を掲載させていただきたいので、回答の締め切りを3月30日(金)まで延期することになりました。過去5年間に刊行されました、著書、論文、実践報告などについての情報を「研究動向調査票」に記載の上、下記宛先まで郵送して下さいようご協力をお願いします。

日本国際理解教育学会・紀要編集委員会

〒192-0352 東京都八王子市大塚359

帝京大学文学部国際文化学科 樋口研究室宛

寄 贈 文 献 ・ 図 書

◆会員等からの図書・文献寄贈

次の図書や文献が学会に寄贈されました。この場をかりて御礼するとともにお知らせします。なお、今回は自著またはかかわった方からの紹介を掲載します。

- 俵木浩太郎著『平和の哲学～孔子からユネスコへ～』古今書院刊 古今書院より
- 森毅(鳥根県国際理解研究所) 『海外の教育7・8月号』
- 『グローバリゼーションと21世紀の「開発」を考える』開発教育協議会 全国開発教育協議会より
- 山本雅代編著『日本のバイリンガル教育』明石書店 宋英子(大阪市教育センター教育振興室)より
- 今井啓一著『情報文化の国際交流—異文化理解に向けて—』学術図書出版
- 寺島隆吉著『国際理解の歩き方』あすなろ社
- 宇土泰寛著『地球号の子供たち—宇宙船地球号と地球子供教室』創友社
- 偕成社『きみたちにもできる交際交流』7巻
- 偕成社『きみたちにもできる交際交流』第2期・7巻
- 山田博光「国際シンポジウムの教訓」(『帝塚山学院大学国際理解研究所報』第13号)
- ビデオ『未来に結ぶ白い糸—養蚕にける国際協力— (財)オイスカより

◇寺島隆吉：『国際理解の歩き方』(発行 あすなろ社/発売 三友社出版)

本書は私が高校教師だった頃から折にふれて書き溜めてきたものを「国際理解」という観点で整理して1冊の本にまとめたものです。本書を通じて読者に「こんな旅の仕方もあるのか」「こんな国際理解もあるのか」という新しい発見を少しでも提供できればというのが私のささやかな願いです。

私は高校では英語を教え、現在は大学の教師として「国際理解教育」という授業を担当しています。が、単に教科書を教えるだけでは満足できなくて、自分独自の教材を開発し、その教材に関係するところを自分の眼で確かめるというのが、これまでの一貫した私のやり方でした。その際、各地で多くの写真を撮り、資料もたくさん集めてきましたが、その一部をようやく本書のようなかたちで公けに出来る機会を得たことは嬉しい限りです。

収録した原稿は、巻末での初出一覧に見る通り、私が高校教師の頃、無謀にも生徒引率というかたちで初めての外国

旅行に出かけた時のものから、最近の大学での授業「ロックで学ぶ国際理解」を論文としてまとめたものまで多様です。
第1章 平和・人権・環境の歩き方：第1節 アメリカの光と影、第2節 ヨーロッパ HOB0 の旅、第3節 不死鳥の街での熱い祭典（アメリカ、フェニクス）

第2章 平和・人権・環境の読み方：第1節 キングとマルコム、第2節 ベトナム戦争と現代、第3節 オッペンハイマーと原爆
第3章 平和・人権・環境の学び方：第1節 足元の環境問題（長良川）、第2節 映像と音楽で学ぶベトナム戦争、第3節 先住民の闘いから何を学ぶか

第4章 映像と音楽で学ぶ人権・平和・環境：世界人権宣言の歩き方・読み方・学び方

大学で科学史（特に物理学史）を専攻した自分が、高校の英語教師を経て、今では大学で「国際理解」を担当しています。ビートルズの曲のひとつに Long and Winding Road というのがありますが、自分の軌跡を振り返ってみると、まさにこのタイトルのようにあり、自分でも実に奇妙な気がします。定年までまだ10年弱ですが、定年後も含めて、この後、私がどのような人生を歩むことになるのか、自分でも予測がつかません。しかし本書に何か価値があるとすれば、この私の奇妙な軌跡が、「国際理解」というものに、従来とは違った新しい視点を提供することになっているかも知れない、という点でしょう。

とは言っても、これはこっちの勝手な思いこみなので、読者諸氏の厳しいご批判をいただければ幸いです。

◇宇土泰寛『地球号の子どもたち 一宇宙船地球号と地球子供教室一』創友社

地球時代の到来は、私達の教育実践の場にも、日々影響を及ぼしてきています。それは、「なぜ日本の学校は独自で多様な手法を生み出さないのか」「日本では70年代に、欧米のように、地球的視点を持った独自な実践が創出されなかったのか」「教室の国際化は」「子供たちの悲痛な訴えを乗り越え、共生空間をどうつくるか」などなど、多くの疑問や課題を投げかけてきます。

しかし、子供たちとの実践は、常にこれらの課題解決に向けての希望を与えてくれました。序章と第一章での異文化の中で生きる子供たちは、苦勞しながらも自分達で生きる知恵を見出しています。第二章での独自な理論からのプログラム作りが今の総合的な学習のカリキュラムづくりに役立っています。更に、TSTは、カリキュラム評価や学習者の自己評価への示唆を与えてくれます。教室の周縁からは、教師の意識変革、子供の自分づくり、地域との関わり、総合的な学習と基礎学力形成へのスタンスが見えてきます。第三章の地球子供教室は、外国人児童との共生空間づくりを目指してきました。

日本語指導と国際理解教育の融合を図る中で、総合的な学習に結びつく状況的なカリキュラム、学習環境のしかけ、場の持つレトリック、ボランティアとのネットワーク、また、児童の言語学習と言語習得との違い、小学校英語のあり方など、多くの示唆を与えてくれます。そして、第四章の地球時代の教育をめざしたカリキュラムづくりと同化から共生の原理への転換を図る教室改革へと進みます。

これらの実践の基礎には、理論と実践研究が相互に結びついた協働的実践創出があります。まさに理論と実践は、その協働性の中で、豊かな示唆を常に与え続けてくれます。本学会は、理論と実践とが連携できる場であり、本書がその一助になればと願っています。

序章 外国の子供たち今
第1章 異文化の中の子供たち
第1節 外国人の子供たちと教育課題
第2節 ニューヨークの日本の子供たち
第2章 宇宙船地球号
第1節 国際理解教育プログラムの創出
第2節 周縁からの教室改革
第3章 地球子供教室
第1節 学びの共生空間
第2節 地球子供教室カリキュラム
第4章 地球時代の教育
第1節 国際理解教育カリキュラムの展開
第2節 国際理解教育テキスト教材づくり
第3節 教室の改革
終章 協働的実践の創出

◇中島章夫『君にもできる国際交流』 偕成社

偕成社から、この3月に出版される第3期「ヨーロッパの国々」10冊の出版をもって、全24冊の計画が完了する、『きみにもできる国際交流』という、楽しい写真やイラストの国際理解の本が全国の小・中学校の間で人気である。

「アジアの国々」7冊(1999年)、「英語を話す国々」7冊(2000年)と合わせて、世界の40ヶ国余りをカバーをするこの企画は、子どもの目で世界をとらえた初めてのことで、それぞれの国について、子どもがまず興味や疑問を感じるようなこと、例えば、地理的な位置や大きさ、その国の人々、挨拶や衣食住、学校生活や遊び、日本との関係などを、豊富で美しい写真、楽しいイラストなどで解説しているため、子どもはもちろん、大人にとっても興味尽きない読み物になっている。

「スイス・オーストリア編」から、スイスの内容を簡単に紹介すると、まず表紙を聞くと、スイスで話されている四つの公用語で日常的な挨拶の表現が比較してある。パート1がメインで、スイスってどこにあるの？スイスの4大都市、市民の暮らし、家の中のようす、食事のようすと続いて、学校訪問では、インターナショナルスクールや日本との関係のある学校の様子、遊び、スポーツ、さらには、スイスの鉄道網、スイスの自然や環境問題などが面白く解説される。パート2には、日本で見つけたスイス、パート3にはスイスの歴史、税金、ゴミ問題などが解説してあるのだが、いずれも最近の取材を中心に美しい写真とイラスト入りなどで、子どもの国際理解入門書として最適であろう。

「アジアの国々」が大阪外国語大学の西村成雄教授、「英語を話す国々」が京都大学の中西輝政、そして「ヨーロッパの国々」が東京外国語大学の富盛伸夫副学長がそれぞれ総研修に当たっているが、その他にも30数人の学者、研究者がこのシリーズの作成に協力していることも、本シリーズが人気の中にも信頼を得ている所以である。

理事会・常任理事会報告

◆平成12年度 第2回理事会議事録

日時：平成12年11月19日（日）14：00～17：00

場所：目白大学会議室

出席者：天城勲、安藤益代、宇土泰寛、岡田真樹子、川端末人、多田孝志、千葉果弘、中島章夫、中西晃、二宮皓、星村平和、嶺井明子、米田伸次、渡部淳

I. 報告事項

1. 第11回大会について

嶺井理事より13年6月9、10日の両日筑波大学で11回大会が以下の予定で行われる旨の報告があった。

- ① 奈良教育大学で行われた時程で計画する。
- ② 公開シンポジウムは「ITと国際理解教育」をテーマに行う。

2. 紀要第7号の編集進行状況について

渡部理事より別紙の資料により以下の報告があった。

- ① 公募原稿は3本が審査中で次回の委員会で決定する。
- ② 第3回懇話会の話題提供者は交渉中で1月中旬に決定する。
- ③ 会員研究動向の調査は年内に発送し、1月中旬に回収する予定。

3. 実践研究委員会より

多田理事より11月15日の目白学園での研究会には186名が参加し、好評であった旨の報告があった。米田理事より資料1に基づいて、2月4日の熊本での研究会についての報告があった。

4. 13年度の国際委員会の活動について

千葉理事より13年度のスタディツアーは韓国を予定し、その準備は現委員会でしている旨の報告があった。

5. 13年度の特定課題研究について

宇土理事より資料に基づいて、次年度の特定課題研究についての報告があった。これに対しいくつかの意見が出され、研究委員会で検討することとした。

6. 会費納入状況について

中西理事より会費納入状況は77%程度であるとの報告があった。

II. 審議事項

1. 定年制実施に伴う理事選挙の内規について

中西理事より資料2による提案があった。被選挙人名簿には内規に該当する会員には何らかのマークをつけることとした。これに関する資料2、3の会員への案内状と返答用はがきは一部修正の上承認された。

2. 選挙管理委員会の構成と理事選挙の実施について

中西理事より資料4による提案があり承認された。

3. 事務局の移転について

中島理事より経過報告と国立教育研究所に交渉中であるとの報告があった。

4. 規約改正について

中西理事より資料5-1および5-2により提案があり、承認された。

5. 新入会員審査

次の3名の入会審査があり、承認された。

正会員—金子哲也、井田仁康 学生会員—木之下研悟

7. その他

ビジョン検討委員会は、次年度より企画委員会と改称して引き継がれたいとの要望があった。

◆平成12年度 第1回常任理事会議事録

日時：平成12年9月9日（土）午後2時～5時40分

場所：目白大学会議室

出席者：天城、天野、新井、川端、島、多田、千葉、中島、渡部、中西

I. 報告事項

1. 第10回大会の報告

田淵大会委員長が欠席のため予め送付された資料1、2、3による報告が中西理事よりあった。分科会の持ち方と国際協力事業団からの補助について、田淵理事に問い合わせることとした。

2. スタディ・ツアーの報告

千葉理事及び中島理事より8月に実施された中国スタディ・ツアーの報告があった。また、星村理事の感想文も配布された。

- ・参加者は13名。
- ・中国の学者、研究者と意見交換、中学校訪問などで意義のあるツアーであった。
- ・学校では日本の高校との交流を希望していること、研究所に学会の紀要を送付して欲しいなどの希望があった。

3. 平成12年度実践研究会の報告

多田理事より資料5-1、5-2による計画の報告があった。いくつかの要望や意見交換のあと承認された。

4. 紀要第7号の編集状況

渡部理事から次のような編集状況の報告があった。

- ・応募は19点である。
- ・10周年記念号として例年よりも頁数を増やす方向で考えている。
- ・このため、依頼原稿を考え、書評、文献紹介も多めにする。
- ・研究動向欄を設け会員の研究業績を過去5年間について編集する。

なお、年次大会の特定課題研究の成果も掲載してはという意見があり、検討することとした。

II. 審議事項

1. 定年制の実施と理事定数について

・検討委員会を設置して、早急に案を作成し常任理事会に諮ることとした。なお、審議事項の2及び4についても検討委員会で案を作成することとした。

・検討委員会の委員は次の4名となった。川端末人、相良憲昭、中島章夫、中西晃

2. 13年度の特定課題研究について

島理事より研究委員会の13年度の特定課題研究は「地球時代における国の役割の学習」という原案が提示され、これについて話し合った。主な意見は

- ・国体論などの復古調に利用されないように気をつけて欲しい。
- ・単なる授業実践事例にとどまらず、学習理念やカリキュラムに発展させてマニュアルのようにして欲しい。
- ・「ネーション・ステイト」を何で代表させるのか。例えば、人か文化といった場合、異なる視点をどのようにまとめていくのか。また、文化と文明の違いも出てくる。
- ・小学生の子供に国といってもわからないのではないか。
- ・これまでの2年間の研究を見ても、国の概念が統一されず、バラバラではないのか。
- ・「国」をどういう視点で取り上げようとしているのかわからない。
- ・紀要第6号の天城論文の意図が委員会で捉えているとは思えない。

3. 新入会員審査

資料6により審議の結果、全員の入会を承認した。

4. その他

検討委員会の案を審議するための常任理事会を10月15日、22日、29日のいずれかの日曜日の午後開催することとなった。

◆平成12年度 第2回常任理事会議事録

日時：平成12年10月22日（日）午後2時～4時30分

場所：目白大学会議室

出席者：天城、安藤、川端、多田、千葉、中島、樋口、米田、渡部、中西

1. 役員選挙等に関する案の審議

川端理事から検討委員会の報告が資料1に基づいてあった。それについて審議の結果、次の点を修正の上承認された。

- (1) 理事定数は、選挙による選出理事を15名とし、会長推薦理事数を5名以内とする。
- (2) 選挙管理委員会の構成は、一柳武（東京学芸大学附属高等学校大泉校舎）、岡田真樹子（国際基督教高等学校）、森茂岳雄（中央大学）の3名とする。
- (3) 新事務局については現役員会で決めることを再確認した。第一候補は相良憲昭氏（国立教育研究所）、不可能の場合は渡辺良氏（国立教育研究所）、米田伸次氏（帝塚山学院大学国際理解研究所）に交渉し、次回理事会で結論を得ることとした。
- (4) その他、70歳定年に伴う生年月日の調査は、プライバシーの問題もあるので慎重を要する必要があるため、原案を事務局で作成し、理事会に諮ることとした。

2. 実践研究会の準備状況について

多田理事より資料2により準備状況の報告があり承認された。

また、米田理事より平成13年2月4日に予定されている熊本での研究会の概要について報告があった。

3. 紀要第7号の編集状況について

渡部理事より資料に基づいて以下の状況報告があり承認された。

(1) 公募論文は7本で、現在査読中である。

(2) 予定している会員の「研究動向」についてはフォーマットを作成中で、年末か年始に会員に対して発送することになっている。

4. 入会審査

資料3の足立恵子氏の入会を承認した。

5. その他

(1) 千葉理事より国際委員会では次年度のスタディツアーは韓国を予定している旨の報告があった。

(2) 例年12月に実施しているの理事会は、役員選挙に関する事項の審議があるため、繰り上げて11月19日(日)午後2時より開催することとした。

新入会員及び会員異動

◆入会会員

以下の26名の方が平成12年8月から13年3月の間に入会しました。

氏名	所属	連絡先
渡邊 あや	広島大学大学院	567-0009 広島県東広島市西条下見4253 PINE HILL523
Arthur MEERMAN	広島大学大学院	739-0000 広島県広島市中区東白島町8-13-401
Dy Sideth SAM	広島大学大学院	739-0043 広島県東広島市西条西本町28-6-611
Almonte HERLYNE	広島大学大学院	739-0046 広島市東広島市鏡山1-1-1 広島大学大学院
金井 裕美	広島大学大学院	739-1732 広島県広島市安佐北区落合南一丁目2-19
メーカー 亜	ミネソタ大学大学院	669-1241 兵庫県宝塚市清荒神4-7-3 (笹田 方)
王 幡	広島大学大学院	739-0046 広島県東広島市鏡山2-812-62 池の上広島大学学生宿舎5-518
奥田 久春	広島大学大学院	739-004 広島市東広島市鏡山1-1-1 広島大学大学院
下村 智子	広島大学大学院	739-0046 広島市東広島市鏡山1-1-1 広島大学大学院
稲浦 裕子	広島大学大学院	739-0046 広島市東広島市鏡山1-1-1 広島大学大学院
南舘 伸介	広島大学大学院	739-0046 広島市東広島市鏡山1-1-1 広島大学大学院
釜田 聡	上越大学学校教育学部附属中学校	943-0828 新潟県上越市北本町3-4-2メゾンルミエールC
黒田 矢須子	横浜国立大学	240-850 神奈川県横浜市保土ヶ谷区常盤台79-2
井ノ口 貴史	大阪府立加納高等学校	630-0114 奈良県生駒市鹿ノ台西1-3-8
大野 毅	神戸大学大学院	651-1211 兵庫県神戸市北区小倉台6-18-3
笹山 有香	広島県大竹市立小方中学校	730-0602 広島県大竹市南栄3丁目6の8レオパレス106号室
Manfred RINGHOFER	大阪産業大学	630-8044 奈良県奈良市六条西2-9-21
久保田 一志	栃木県足利南高等学校	326-014 栃木県足利市葉鹿町1690-5
藤兼 裕子	ロンドン大学大学院	Room6. 12 Woburn square. London. WC1HONS. England
森川 与志夫	奈良県立二階堂高等学校	630-0114 奈良県生駒市鹿ノ台西1丁目4-12
平野 吉三	啓明学園	196-0002 東京都昭島市拝島町5-11-15
牛島 彰子	文部省	201-0001 東京都昭島市西野川1-11-3
足立 恵子	愛知県立豊野高等学校	473-0918 愛知県豊田市高見町1-26C
井田 仁康	筑波大学	305-8572 つくば市天王台1-1-1 筑波大学教育学系
木之下 研吾	筑波大学大学院	305-0005 つくば市天久保4-8-8 第一竹ハイツ205
金子 哲也	東京都大田区立矢口中学校	227-0061 横浜市青葉区桜台2-1-405

◆会員の移動

◇訃報

理事の河内徳子氏(大東文化大学)が10月2日にお亡くなりになりました。謹んでお悔やみ申し上げます。

◇連絡先・電話変更

氏名	連絡先	電話・FAX
比奈地康晴	336-0931 浦和市原山4-21-7	
佐々木栄子	395-0007 長野県飯田市今宮町4-64-1	0265-52-0889
佐々木善子	113-0021 東京都文京区本駒込1-17-9 A-304	03-5976-8129
佐藤 昭治	186-0003 東京都国立市富士見台1-8-48-201	
加藤 優子	194-0032 東京都町田市本町田1407-29	
鷺原 進	774-0015 徳島県阿南市才見町光の大地1-82	0884-23-1417
大津和子	002-8071 北海道札幌市北区あいの里1条6丁目3-1-702	
野崎 志帆	665-0024 宝塚市逆瀬台5丁目11-2 本郷方	0797-77-5266
江夏 啓子	102-0082 東京都千代田区一番町20-10-602	03-3221-8765
前田 久夫	615-0067 京都市右京西院小米町34-8	
前田 瑞枝	790-0864 松山市築山町7-7-1102	089-935-4434
詫摩 武雄	108-0073 東京都港区三田2-4-9-302	
山口 修司	AMAFU VILLA No.2 MUHOYA AVENUE NAIROBI KENYA	
近藤 真理子	592-8334 大阪府堺市浜寺石津町中4-2-26	0722-44-8267

◇所属変更

比奈地康晴	埼玉大学留学生課
初海茂	八王子市立松木中学校
佐々木栄子	飯田市立上郷小学校
灘 諄一	東京都葛飾区飯塚小学校
古本 英之	札幌国際大学
榎 拓治	埼玉県総合教育センター
藤原 勝彦	帝京大学理工学部
福田 英樹	飯能市立加治中学校
芦田 順子	東京国際日本語学院
瀬戸 健	富山県高岡市立横田小学校
中池 さな恵	栃木県足利市立毛野中学校
山下 亮	千葉県船橋市立八木が谷小学校
西川 敏之	山口県大島郡教育事務協議会
山口 修司	ナイロビ日本人学校
古泉 忠之	千葉県木更津市教育委員会学校教育課
江崎 広章	千葉県香取郡大栄町立川上小学校
長嶋 清	神奈川県横浜市東小学校
前田 隆子	カリタス女子短期大学
御園生 百恵	神奈川県横浜市立戸塚高校

◇メールアドレス変更

安藤 益代	ando@isa.co.jp
福山 文子	faya@mx.bttcn.ne.jp
井上 敏之	toshi-inoue@nrj.liglobe.ne.jp

◇17号訂正

高尾 隆	電話	042-576-6330 →042-576-3660
森茂 岳雄	住所	〒092 八王子市1936-11 →〒192 八王子市193-11
	メール	morimo@tamacc.chuo-u.ac.jp

◆退会会員

次の20名の方が平成12年度をもって退会しました。

長谷川和則、落葉典雄、清島真、宮原みどり、宮崎洋一、加藤玲子、加藤心津子、太田美智彦、森茂、蓮池守一、土山忠子、近藤正隆、上寺久雄、小室桃子、阿久沢麻里子、三浦順治、野口芳宣、岡田精助、鷹野早智子、多田方
現会員数 463名

◆日本国際理解教育学会のホームページのお知らせ

ホームページを開設しております。URLは次です。

<http://www2.ocn.ne.jp/~kokusaig/>

◆会員の図書・文献寄贈のお願い

会員の皆様関わった文献・図書・報告書・教材など、また、会員の所属する学校での紀要等がありましたら、学会にご寄贈ください。最近そのような資料を求め方が増えております。学会の宣伝にもなりますのでお願いします。その際、助成金をいただいている公文国際奨学財団にも送りたいので、できましたら2部お送りください。

また、今回のニューズレターには著者や関わられた方からの内容紹介を掲載しました。

◆送付先住所・所属等変更の場合のお願い

事務局から郵送物を送りましても返却される場合があります。送付先住所、所属等に変更がありましたら、ファックスなりEメールでお知らせください。2001（平成13年）度は、新しい名簿を作成することになっています。この4月から異動の方もいらっしゃるかと思いますので、よろしくお願いします。

◆年会費納入のお願い

年会費未納の会員は、その都度連絡を差し上げておりますが、年度末なのでお支払いくださるよう重ねてお願い致します。

なお、下記のお知らせのように、次年度より事務局の移転に伴い、郵便振込み口座番号や銀行の口座番号も変わりますので、平成12年度までの会費未納入の方は、3月中にお納めくださるようお願いいたします。

平成11年度以降の会費： 正会員：8,000円 学生会員：3,000円 団体会員：30,000円

・郵便振り込み 口座番号 00120-5-601555

加入者名 日本国際理解教育学会

・銀行振り込み 富士銀行 中井支店（249） 普通預金

口座番号 1783886

名義人 日本国際理解教育学会

なお、平成10年度までは正会員の年会費は5,000円（学生会員は3,000円）です。

学会事務局移転のお知らせ

2001年（平成13年）4月より、学会事務局が下記のところに移転することになっています。しばらくはご不自由をおかけすることもあろうかと思いますが、よろしくお願いします。

なお、下記の電話番号及びファックス番号は、帝塚山学院大学国際理解研究所のものです。学会の電話番号やファックス番号は改めてお知らせすることになります。

〒589-8585 大阪府大阪狭山市今熊2-1823

帝塚山学院大学国際理解研究所

TEL：0723-65-0865

FAX：0723-65-5628